

村上 春樹
『風の歌を聴け』

分身の輪舞 (2・完)

鈴木 忠 士

I はじめに

II 女の子たちの輪

- (1) 初めてデートした女の子
- (2) 最初の女の子
- (3) リクエスト曲をプレゼントした女の子
- (4) ヒッピーの女の子
- (5) 仏文科の女の子 …… (この項まで第 33 卷第 1 号)
- (6) 小指のない女の子
- (7) 手紙でリクエストした女の子 …… (以上本号)

II 女の子たちの輪 [承前]

(6) 小指のない女の子

第 8 章での「僕」の最初の観察では、「小指のない女の子」の「年齢は 20 歳より幾つか若」⁽²⁷⁾¹⁾と見えた。しかし、その後彼女の年齢はあいまいになっていく。第 33 章では、「彼女は三歳くらいは老けこんでいた」⁽⁹⁹⁾という。

第20章で、「お父さんは五年前に脳腫瘍で死んだ〔傍点は鈴木、以下断りなきときは同じ〕」、「丸二年苦しんでね」⁽⁶⁹⁾と彼女は言っている。「五年前」とは「1970年の8月」から数えてのことだから、1965年で、「お父さん」の発病あるいは闘病生活の始まりはその「二年前」、1963年のこととなる。

第36章で彼女は「お父さんが病気になった年」から「いろんなことがうまうまなくなかったの」⁽¹¹¹⁾と言っている。すでに指摘したように「僕の話」の中では、「1963年」は凶年であったから、ここでもそれが確認されるということだ。

だがこの第36章の、上に引いた彼女の言葉の前後を見直すと奇妙なことに気づく。「いろんなことがうまうまなくなかった」のは、「何年くらい前？」という「僕」の問いに、「12, 13……お父さんが病気になった年」⁽¹¹¹⁾と答えている。この「12, 13……」は、前後を見れば、「12, 13……」年前ととれる。それだと、先に推定された7年前という「お父さん」の発病時期とはかなり隔たりがある。

この作品には「数値」⁽⁷⁴⁾が頻出し、表記には漢数字とアラビア数字が併用されているが、その使い分けには必ずしも一貫性がない。たとえば年について見ると、一方では、「三年」^(17, 22)、「二年」⁽⁶³⁾、「一年」⁽⁷⁸⁾、「百年」⁽¹⁰⁴⁾、「十何年間」⁽⁸⁰⁾、「三年間」⁽¹¹²⁾、「五年前」⁽⁶³⁾、「七年前」⁽⁷³⁾、「二年前」⁽⁸⁰⁾などとあるが、他方では、「8年」⁽⁹⁾、「15年」⁽¹⁰⁾、「50年」⁽¹⁵⁾、「10年」⁽¹¹⁴⁾、「8年間」^(7, 65)、「79年間」⁽¹⁰⁾、「14年間」⁽²⁶⁾、「3年前」⁽¹⁵⁾、「5年前」⁽⁴⁷⁾、「25年前」⁽⁸³⁾などともある。

ただ、歳の表記には、一般にアラビア数字が用いられている。「20歳」^(7, 27, 36)、「30歳」^(19, 30, 99, 117)、「14歳」^(26, 78)、「21(歳)」^(47, 58)、「17歳」^(59, 112)、「16歳」⁽⁵⁹⁾、「29歳」⁽¹¹⁷⁾とあり、例外は「八つ」⁽⁶⁴⁾と、「三歳」⁽⁹⁹⁾の二つだけである。

「何年くらい前？」という問いへの答えであるから、「……」に入るのは、論理的には、「年前」、あるいは数字とともに「年前」という言葉であるだら

うが、会話の受け答えに飛躍やずれはつきものと考えれば、数字なしあるいは数字付きで、「歳頃」または「歳のとき」が入る可能性も否定できまい。「……」という言いよどみが表わしているのは、彼女の記憶のあいまいさであるのだろうが、年か歳かをあいまいにするための細工と見ることもできるのである。

そこで「12, 13」歳のとき、あるいはその頃と読みかえると、「お父さん」の発病が前の推定どおり7年前とすれば、「1970年の8月」現在の彼女の年齢は、19歳か20歳となる。また、「……」を14という数字が埋めてもおかしくはないのだから、その場合の彼女の年齢は、「僕」や「仏文科の女の子」と同年の「21歳」⁽⁵⁸⁾となる。

ただし、このような読みかえに矛盾がないわけではない。「お父さんが病気になる年」という言葉に続けて、「それより昔のことは何ひとつ覚えてないわ」⁽¹¹¹⁾と彼女は言っているが、別のところでは、「八つの時の時の時」⁽⁶⁴⁾の記憶を語っているからである。

いずれにしても、最初の、「年齢は20歳より幾つか若く」⁽²⁷⁾という「僕」の言い方からしてすでにそうだが、「小指のない女の子」の「年齢」があいまいである、あるいはあいまいにされていることだけは確かである。そしてこれは、他の「女の子」たちに比べて、「小指のない女の子」の特異な点の一つである。

彼女以外の「女の子」たちは、その年齢が触れられていない「初めてデートした女の子」を別にすれば、「最初の女の子」は「17歳」⁽⁵⁸⁾、「ヒッピーの女の子」は1968年に「16歳」⁽⁵⁹⁾、「仏文科の女の子」は「1963年8月」に「14歳」⁽⁷⁸⁾、そして次の項で扱う「手紙」⁽¹¹²⁾の「彼女」⁽¹¹⁴⁾は「17歳」⁽¹¹²⁾というように年齢が明記されるか、あるいは「リクエスト曲をプレゼントした女の子」のように、「クラスの女の子」⁽⁴⁶⁾ということから、「僕」と同年の「21」⁽⁴⁷⁾歳と推定されたのである。

「小指のない女の子」の「年齢」があいまいであることの原因は何か。そ

れは、他の「女の子」たちの「1970年の8月」現在における年齢を見ればわかる。「手紙」の「彼女」は「17歳」,「ヒッピーの女の子」は18歳,「仏文科の女の子」は「21」⁽⁷⁸⁾歳,「リクエスト曲をプレゼントした女の子」もおそらく同年というように,「17」から「21」までの幅がある。それは,「20歳より幾つか若く」から「三歳くらいは老けこんでいた」までの,そして,先に推定された19歳から21歳にわたる,「小指のない女の子」の「年齢」のあいまいな幅と重なり合うのである。そこから帰結するのは,彼女が他の「女の子」たちを代表する者の位置にあるのではないかということだ。

彼女の「名前」の扱われ方についても同様のことが言えよう。彼女の「ベッド」の上で「目覚め」た「朝」,「僕」は「10分ばかりかけて女の名前を思い出してみようとしたが無駄だった。第一に女の名前を僕が知っていたのかどうかさえ思い出せない」と言って,「あきらめ」るのだ。

だが,そのあとで,「目覚め」⁽²⁷⁾た彼女に「説明」⁽²⁸⁾をもとめられた「僕」は,「君のバッグ」の中にあつた「君あて」の「葉書の住所を頼りに君をここまで連れてき」⁽³⁰⁾たと言っている。

「10分」もかけて「女の名前を思い出してみよう」とするだけの執着があつたのなら,なぜもう一度「バッグ」の中の「葉書」を出して,その「あて」名を確かめようとはしなかつたのか。それにまた,「女の名前を知っていたのかどうかさえ思い出せない」と言っていた者が,その舌の根の乾かぬうちに,どうして「君あての葉書」⁽³⁰⁾を「頼りに」云々と,よどみなく「説明」できたのか。

ここには,「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の「名前」^(47, 55)の場合と同様,「語」⁽⁸⁾り手である「僕」の作為,隠蔽しようとする意思を認めることができるだろうが,いずれにしてもその結果,「小指のない女の子」は匿名あるいは無名にとどまることになる。それは他の「女の子」たちを代表する位置にある者に,あるいは少なくともそれらと入れ替えることができる者にふさわしい条件であるだろう。

人の顔には、走馬燈のように、血縁の者たちの面影が映り移ってゆく。あたかもそのようにして、「小指のない女の子」には、他の「女の子」たちの面影が宿っている。だからこそ、「僕」は初めて彼女と向かい合ったとき、「彼女は僕を少しばかり懐しい気分させた。古い昔の何かだ」と言う。「古い昔」に「ごくあたり前の状況でめぐりあえた」⁽³¹⁾日の「女の子」とは、「初めてデートした女の子」あるいは「最初の女の子」のこともあるのだろう。そしてまた、「小指のない女の子」との最後のデートのときにも、彼女の「肩を抱」きながら「僕」は言うのである。「夏の香りを感じたのは久し振りだった。潮の香り、遠い汽笛、女の子の肌の手ざわり、ヘヤー・リンスのレモンの匂い、夕暮の風、淡い希望、そして夏の夢……」、「しかしそれはまるでずれてしまったトレーシング・ペーパーのように、何もかもが少しずつ、しかしとり返しのつかぬくらいに昔とは違っていた」⁽¹⁰⁷⁾と。

言いかえれば、「小指のない女の子」は、「昔」の「夏の夢」に相継いで現われた「女の子」たちの、「トレーシング・ペーパー」で写しとったコピーのような、分身なのだが、同時にまた、「ずれ」を意識させるコピーでもある。そして、この「ずれ」を「とり返しのつかぬ」こととして「僕」に意識させるものは、単に「僕」の青春の喪失というだけではなくて、「僕」と「女の子」との間に起きた、「とり返しのつかぬ」喪失の経験、おそらくは死の経験であるだろう。

さて、「小指のない女の子」を他の「女の子」たちと区別するなよりの特徴は、むろん「小指のない」ことである。

彼女の「小指」がないこと、あるいは指が欠けていることは、物語全体を通して、語句や文によって、くり返し語られている。そのすべてを挙げると、以下のようなになる。

- (i) 「彼女の左手には指が4本しかなかった。」⁽²⁷⁾

- (ii) 「小指のない女の子」(50)
- (iii) 「4本の指で伝票の束をパラパラと繰った。」(52)
- (iv) 「八つの時」に「9本しか手の指がなくなった」, 「左手」に「4本の指が気持良さそうに並んでいた。」(64)
- (v) 「小指のないこと」(65)
- (vi) 「彼女は指が5本ついた方の手で僕の手を握った。」(104)
- (vii) 「左手の指が4本しかない女の子」(118)

以上をまとめると、「左手」の「指」が「4本」で、欠けているのは「小指」である。加えて、「彼女は左手でこぶしを作り、右の手のひらを神経質そうに何度も叩いた」(106)と言われていることと(iii)を考え併せると、「左手」が利き手と推察される。これらは「何」かを「象徴しているのか」(13)、それとも、単なる偶然、作者の気まぐれの結果なのか。

「小指のない」ということから誰もががすぐ連想するであろうことは、「指切り」の風習である。「指切り」には二つの意味があり、たとえば広辞苑には次のようにある。

- ① 「遊女が相手の男に対して、誓約の証しに小指を切ること。」
- ② 「子供などが約束のしるしとして小指を曲げてひっかけ合うこと。
げんまん。『指切りげんまん、うそついたら針千本のます』²⁾

①の意味には二つのポイントがある。一つは、「小指を切る」のが「女」であること、いま一つは、それが「相手の男」への「誓約の証し」であることだ。

「小指のない女の子」には「相手の男」がいて、「好きになれそうな気がした」のだが、その「子供」を「手術」して墮し、「男」のことは「すっかり忘れちゃった」(110)と「僕」に言う。

「相手の男」との間になにかあったのか、彼女はそれ以上何も語っていないが、別れ話があったのだらうと推察される。「洗面所に寝転がっていた」⁽⁵⁰⁾彼女の「バッグ」の中に「僕」が見つけた彼女「あての葉書」⁽³⁰⁾は、おそらく「相手の男」からのもので、別れを告げる手紙であったのだらう。それだから、「死にそう」なほど「飲んだ」⁽³²⁾のだし、「僕」がそれを「読んだ」⁽³¹⁾かどうか気になったのだ。

彼女は「相手の男」に「小指」を与えた、つまり「誓約の証し」を与えたのだが、「男」は「誓約」に背いて彼女を棄て、彼女も「男」の「子供」を墮ろすことで「誓約」を破棄したということなのだらう。

そのような観点から見れば、「電気掃除機のモーター」で「はじけ飛んだ」という「小指」が「今、何処にある？」⁽⁶⁴⁾という「僕」の問いには、単なる冗談以上のものが含意されていることになる。「小指のない」ことを「指切り」の結果とみなせば、「小指」は「相手の男」のもとにあるはずだし、「相手の男」が彼女を棄てたのなら、「小指」もまた「何処」かに棄てたのだらうから。

「指切り」のもつ②の意味でも、「小指のない女の子」の「小指のない」ことを説明することができるだらう。彼女は「相手の男」と指切りげんまんをしたのだが、「相手の男」あるいは彼女自身がその誓いを破ったのだ。

「げんまん」は「指切り」と同義で用いられるが、原義は「拳万」で、「約束をたがえた時には、拳固（げんこ）で万回打つ」³⁾という意味である。まさにそのようにして、「小指のない女の子」は「左手でこぶしを作り、右の手のひら」を「赤くなるまで叩きつづけ」⁽¹⁰⁶⁾る。「左手」は彼女自身、「右の手」は「相手の男」であるのだらう。あるいは誓いを信じた彼女自身であるのかもしれない。

「指切りげんまん」の下の句、「嘘ついたら針千本のます」も、彼女にはあてはまるようだ。彼女は「嘘をついてた」⁽¹⁰⁰⁾からだ。「針千本」をのむのは、「地獄」⁽⁶⁸⁾で針の山に座るのに似た責め苦であろうが、後に見るように、

彼女は心の内なる無間の闇をさまよう者のひとりなのである。

「小指」を切ると残りの指は「4本」だが、先に見たとおり、「4本」という言葉は作品全体で4度出てきて印象に深い。「4」という数字に「何かの象徴」(61)としての働きがあるとすると、すぐ思いつくのは、一般に「4」が同音の死を連想させるので、忌まれる場合があるということだ。

それでは「小指のない」手が「左手」であり、それが利き手でもあるということには、なんらかの象徴的意味があるのだろうか。

「左」およびその熟語を並べて見ると、その意味は両価的で、悪い意味ばかりではないのだが、右という語の用いられ方と比べると、左膳・左袖・左封じ・左前・左巻き・左回り・左向きなどというように、負の意味合いをもつ熟語の多さが目立つ。あくまでも相対的にはだが、「左」は凶事のしるしでありうると言ってもよいだろう。そのことは、この物語の場合には、先に見た「4」が死を合意しうるということともよく符合するように思われる。

こうしてすでに二重に凶のしるしを帯びた「左手」がまた利き手でもあるということは、「小指のない女の子」の「左手」がもつ、つまりは彼女の「存在」(104)が身に帯びる凶兆を強めるものであろうが、それとともに、「左」および「左利き」がもつ「酒飲み」という意味を活かすものでもあるだろう。彼女は「僕なら死んでる」(32)というほど「ウイスキー」(28)が飲め、「グラスのワインを飲み干し、新しく自分で注いだ」(70)くらい「ワイン」を好む。「禁酒」の「つもりだった」(64)と言うのも、かなりの酒飲みだからだろう。

「左」という語の含む象徴的意味がこのように活かされているとするなら、先に挙げたようなその熟語のいくつかに連想がおよぶのも自然なことだ。

たとえば、左前・左巻き・左回り・左向き、は物事が順調に行かないこと、運がない、あるいは悪くなることを意味するが、「小指のない女の子」も「いんなことがうまくいかなかった」と、「風向き」の「悪」(111)さを嘆いている。

「小指のない女の子」は「自分の家のゴタゴタ」を「僕」に「話」⁽⁶²⁾すが、これも彼女を他の「女の子」たちと区別する特徴の一つである。「話した方がいい」⁽⁶²⁾と「僕」がすすめたからではあるが、他の「女の子」たちの「家族」⁽⁶³⁾については「僕」はまったく関心を示していないし、「家族」という言葉さえ使われていない。

なぜ「小指のない女の子」の「家族」だけが例外的に語られているのだろうか。彼女が他の「女の子」たちを代表する位置にあるからだ。彼女の「家族」関係を語れば、他の「女の子」たちの家族関係についても語ったことになるのである。

「お父さん」が病気で「死んだ」あと、「家族」は「空中分解」した。それは、「よくある話よ」と「小指のない女の子」は言う。だが彼女の語る、残された「お母さん」と彼女との、そして「双子の妹」⁽⁶³⁾と彼女との関係は、「よくある話」とは言えまい。

「お母さん」は「何処かで生きてるわ。年賀状が来るもの」、「双子の妹」は「三万光年くらい遠く」にいると彼女は言う。そして、こんなふうと言うのは「家族の悪口」⁽⁶³⁾になる、と。

「年賀状」によってわかるのは、「何処かで生きてる」ことだけだということ。そこには「お母さん」の「住所と電話番号」⁽⁵⁵⁾がなく、また「年賀」の常套句のほかには何も書かれていないことを示している。それは「私のことを覚えてる？」⁽⁵⁶⁾というシグナルにすぎず、受信者からの応答には関心のない、むしろかわわりを避けていることを、くり返し暗示するためにしか役立たない音信である。だからこそ、それを言うことが「悪口」になるのだ。

「三万光年」についても、同様のことが言える。「三万光年」の彼方にある星は、そのまたたきによって私たちに誘いかけているが、私たちは生きてその星に到達することは決してできない。その星が、「双子の妹」だ。

「双子の妹」を「小指のない女の子」の分身とみなせば、「家族」で残るの

は「お母さん」ただひとりで、「小指のない女の子」の「家族」関係とは結局「お母さん」との関係のことだと言えるだろう。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の項で指摘したように、「お母さん」の「小指のない女の子」へのかかわり方には、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の「僕」へのかかわり方と共通したものがある。いずれも誘いかけながら拒み、その「存在」⁽⁵⁵⁾を「思い出」⁽⁴⁷⁾させながら姿を現わすことはない。

これに対して「小指のない女の子」のほうも、「お母さん」を「好きじゃないみたいだね」と言う「僕」に、「そうね」⁽⁶³⁾と答えるが、その一方で「僕」が耳にする彼女の最後の言葉は、「お母さん……」⁽¹¹¹⁾なのだ。つまり、「お母さん」の彼女へのかかわり方が、誘惑＝拒否、現前＝不在というようにアンビヴァレンツ^{アンビヴァレンツ}的であるのに対応して、娘である彼女の「お母さん」へのかかわり方にもまた、一方では嫌い、他方では慕うというように両価的なのである。

「小指のない女の子」は、「いつも駄目だった。人も好きになろうとしたし、辛抱強くなろうともしてみたの。でもね」と言ったあと、「僕の胸に顔を乗せ、唇を僕」の「乳首に軽くつけたまま」の姿勢で、「お母さん……」⁽¹¹¹⁾と「呟いた」⁽¹¹²⁾という。文脈は私たちに、彼女の「人」との関係が「駄目」になる原因をさかのぼれば、「お母さん」との関係があることを示唆しているよう。

「いろんなことがうまくいかなかった」のは「お父さんが病気になった年」からだ、と彼女は言う。だが続けて、「それより昔のことは何ひとつ覚えてないの。ずっと嫌なことばかり。頭の上をね、いつも悪い風が吹いてるのよ」⁽¹¹¹⁾とも言っている。「すっかり忘れ」るのは「その方が楽だから」⁽¹¹⁰⁾だとするなら、「悪い風」は「お父さんが病気になった」ときからだけではなく、「それより昔」から、そして「いつも」「吹いて」いたということなのである。

彼女は「お母さん」について、「年賀状が来る」ことのほかは何ひとつ「話し」(62)ていない。他方で彼女は、「夢を見るように」(112)して初めて「お母さん……」と、母親への思慕の念を口にすることができる。そこに推察されるのは、彼女の母親との関係には、彼女にとって意識から遠ざけておいたほうが「楽だ」と言えるような「ゴタゴタ」があったのではないかということである。そしてそれは、「昔のこと」、彼女の少女期あるいはさらにさかのぼって幼年期に起きたことなのではないか。それはどのような「嫌な」「ゴタゴタ」であったのか。

「人」や「世の中」とのかかわりの中で私たちがとる行動・振舞いは、無限に多様に見えるが、それらを通底する、いくつかの様式、パターンが見出せる。そうしたパターンには「人」一般に共通するものと、各人固有のものとがあって、後者が人それぞれの性格特徴として私たちの目をひくものとなる。

私たちの性格の基底をなしているそのような行動様式が、私たちの幼少年期における母親（代理者）との関係によって、少なくともその多くの部分が形成されると言ってもよいとすれば、「小指のない女の子」の「人」や「世の中」に対する態度の基本的な特徴をつかむことで、さかのぼって「昔」の彼女の「お母さん」との関係性を推し量ることもある程度には可能であるはずだ。

「小指のない女の子」は「一晩中看病して」(30)くれた「僕」を、「本当に何もしなかったってあなたに証明できる？」と問い詰め、「信じられないわ」(34)と二度言う。それは、「目覚め」(27)ると自分は「裸」(34)で「ベッド」の上に「寝てい」て、「隣に」(27)若い男がいるのに気づいたときの、「女の子」の当然の反応と言えなくもない。しかし彼女がその後、「本当のこと」(103)、「本当に」(107)、「本当？」、「本当にそう思う？」(111)と、「本当」という言葉をくり返し口にし、他方でまた、彼女が「疑わしように」(35)、「疑り深そうに」(50)、「疑ぐり深そうに」(61)していたと重ねて言われているのを見ると、彼女は容

易には人を「信じ」ない、むしろ猜疑心の強い性格であると言ってよいようだ。

また、「いろんな嫌な目にあつたわ」(58)、「みんな大嫌いよ」(106)、「ずっと嫌なことばかり」(111)と、「人」や「世の中」への嫌悪や敵意をあらわにし、「私があなただったら、そのオマワリをみつけだして金槌で歯を何本か叩き折ってやるわ」と、時として「復讐」(71)心の激しさをのぞかせもする。

そのような文脈から見れば、彼女が「親切〔傍点は原著〕」な「僕」に、「最低よ〔傍点は原著〕」(34)、「あなたって最低よ」(52)と「ひどいこと」(57)を言ったり、「あなたに関係ないわ」(33)、「もう私に構わないで」(52)と「僕」とのかかわりを拒否したりするのも、「僕」のことを「意識を失くした女の子と寝るような奴」(34)と思いこんだ「女の子」にありがちな反応とばかりは言えないことになろう。それに彼女は、「ワンピース」を「下着もつけずに」着て、「仕事」に「行」(32)くのである。

結局「小指のない女の子」にとって「人」や「世の中」は、「信じられない」、「疑わし」く「嫌な」もの、「嫌な目にあ」うことが多いので身構え、時には牙をむいて「復讐」する必要があるもの、「構わないで」いてほしい、かかわりをもたないほうがよいものなのだ。

そんな「小指のない女の子」が「他人」(62)とあえてかかわりをもとうとすることは、切れやすい綱の上に足を踏み出すのに似た、危険な冒険であるはずだ。それはたとえば、彼女が「僕」とのかかわりの糸を結び直すために「電話」してきたときの、「まるで安定の悪いテーブルに薄いグラスをそっと載せるようなしゃべり方」(56)によくうかがえるだろう。「安定の悪いテーブル」は「人」や「世の中」と彼女の関係の土台の危うさを象徴し、「薄いグラス」は、「人」や「世の中」とかかわりをもとうとするそれ自身危ういほどに繊細な彼女自身を象徴すると言えるだろう。

「小指のない女の子」の被害的な妄想も、このような彼女の対「人」的な関係の延長上にある。

「一人でじっとしてるとね、いろんな人が私に話しかけてくるのが聞こえるの。……知っている人や知らない人、お父さん、お母さん、学校の先生、いろんな人よ」

「大抵は嫌なことばかりよ。お前なんか死んでしまえとか、後は汚らしいこと……」(106)

「人」とのかかわりは「嫌なことばかり」だという図式が、ここにも見てとれる。彼女が幻に聴く「いろんな人」の彼女に浴せる呪詛の言葉は、彼女自身の「いろんな人」に対する「嫌」悪感や敵意のこだまと解することができる。「お母さん」も「いろんな人」の中のひとりにすぎない、と。

しかし、それだけのことだろうか。妄想は現実を歪めたものではあるが、歪めながら現実の在り所を暗示してもいるのではないだろうか。見かけの上では確かに「お母さん」は「いろんな人」にまぎれてはいるが、「いろんな人」のうちに隠れることで、かえって問題の核心をあらわに示しているのではないか。

返事無用の「年賀状」、「お母さん」の誘惑＝拒否、現前＝不在は、それに苦しむ「子供」(110)にとっては、「お母さん」から受ける攻撃であるだろう。しかもそれは、面と向かっては刃向かうことのできない攻撃である。「夢」の中で「お母さん」と慕う「子供」にとって、「お母さん」は破壊してはならない、それがなくては「生きていけ」(78)ない愛の対象なのだから。

「小指のない女の子」の強い「復讐」心の源には、「お母さん」に向かうべき攻撃性がある、それが回路を閉ざされることで、反転して彼女自身を攻撃してくるのである。「お前なんか死んでしまえ」という呪詛の言葉は、「本当」は彼女自身が「お母さん」に向けて心ひそかに「反芻して」(103)いたものなのだ。

自分を被害者の立場に置く心の操作によって、まず第一に、攻撃しているのは自分ではなく「お母さん」のほうだとすることができる。しかも、「お

母さん」を「いろんな人」の中にまぎれこませることで、迫害者は「人」一般であって、「お母さん」がそこに与っているのかどうかあいまいであるときえすることができる。

第二には、思慕の対象である「お母さん」に「お前なんか死んでしまえ」と思うことは、当然罪悪感のもとになるが、入れ替って「人」一般に「死んでしまえ」と言われる側に身を置くことによって、その罰を受けることができる。彼女が「左手でこぶしを作り、右の手のひらを神経質そうに何度も叩いた。そして赤くなるまで叩きつづけてから、まるで気が抜けたように手のひらをじっと眺めた」(106)のは、そのような心理過程が行動にあらわれたものと見ることができる。「左手」は彼女自身、「右の手のひら」は「お母さん」であり、「叩く」行為は彼女の「お母さん」に向けられた「復讐」心のあらわれなのだ。と同時に、「左手」も「右の手のひら」も結局は彼女自身なのだから、自らの「手」で自らを罰しようとする心の動きの表現なのであると。

「小指のない女の子」の「お母さん」に対する「昔」の関係が、以上のように、被害＝迫害、復讐＝自罰という心的葛藤をはらむものであったとするなら、それを主要な基礎として形成された、彼女の「人」や「世の中」に対する基本的な行動様式の特徴として、不信・猜疑、嫌悪・敵意、関係の拒否などを挙げることができたのも当然のことと言える。

また、そのような文脈を背景として、彼女の理想とする対人関係のあり方も理解されなければなるまい。「誰にも迷惑をかけないで生きていけたらどんなに素敵だろうって思うわ。」(73)

それは裏返して言えば、「誰にも迷惑をかけ」てしか「生きていけ」ない自分なのだということでもある。「みんな」が「嫌な人」(106)であるという思いに先立って、自分が「誰にも迷惑」な、「嫌な」存在でしかないという思いがあるのだ。だからこそ、「誰にも迷惑をかけないで生きていけ」ること

が、対人関係の理想とされる。しかし、彼女自身がすぐ続けて、「できると思う？」⁽⁷³⁾と疑問符を付しているように、それは実現不可能な理想である。というのも、人は「人」とのかかわり合いの中でしか「生きていけ」ないのだから、「誰にも迷惑」でしかない彼女が「迷惑をかけ」ずにすまそうとすれば、「人」とのかかわりをもたないこと、「生き」ること自体をやめなければならないのだから。

「年賀状が来る」⁽⁶³⁾だけという「お母さん」の娘へのかかわり方は、「迷惑をかけないで生きていけたら」という理想を追求したもの、つまり、かかわり合いの接点を最小限にすることにつとめたものとも言える。しかし、すでに述べたとおり、「何処かで生きてる」⁽⁶³⁾としかわからない「お母さん」から「年賀状が来る」ことさえもが、娘を傷つけずにはおかない。その一つ一つが、受取人である娘に、彼女は「お母さん」にとってかかわりを極力避けたい、「迷惑」な存在、「嫌な人」でしかないと教えるのである。

「小指のない女の子」の「お母さん」との関係が、彼女の対人関係の原型となっていることは、「相手の男」⁽¹¹⁰⁾や「僕」との関係の中でそれと相似のパターンがくり返されているのを見てもわかる。

「相手の男」は「葉書」⁽³⁰⁾を、「お母さん」は「年賀状」を彼女によこし、おそらくいずれにも「住所と電話番号」⁽⁵⁵⁾はなく、ふたりとも「何処かで生きてる」と知れるだけだ。「手紙」によって「男」は「子供」⁽¹¹⁰⁾を孕んでいる彼女を棄て、便りが「年賀状」でしかないことによって「お母さん」は「子供」である彼女を見棄てていることがかえってあらわになる。

「相手の男」のことを「小指のない女の子」は「好きになれそうな気がしたの。ほんの一瞬だけどね」⁽¹¹⁰⁾と言う。この「男」についても、「好きじゃないみたいだね」と聞かれたら、「お母さん」のときと同じ様に、彼女は「そうね」⁽⁶³⁾と答えることだろう。「男」の「子供」を「手術」⁽¹¹⁰⁾で墮ろしたことは、「男」とのかかわりの痕跡を消し去ることであり、「男」への一種

の「復讐」と言えようが、それはまた、立場を替えた、「お母さん」への「復讐」とも言える。「子供」である彼女を見棄てている「お母さん」の振舞いを反復したのであると。

「相手の男」についてはその「子供」を宿していたこと以外には、「お母さん」については「年賀状が来る」こと以外には、彼女は何ひとつ語っていない。「男」の場合と同様、彼女は「お母さん」のことも「すっかり忘れちゃった」し、「顔も思い出せない」のかもしれない。「その方が楽だから」(110)だ。

今度は「僕」との関係を見てみよう。最後のものとなったデートの「夜」,
「僕」は「小指のない女の子」と、結局「セックス」(109)なしで「抱き合っ」(111)
てすごす。そして彼女は、「お母さん」に抱かれた幼児のようにして「眠っ
ていた」(112)のだった。ふりかえって、ふたりが初めて出会った「夜」(35)を
見ると、「裸」(34)で「隣に寝ている」(27)「小指のない女の子」に「僕」は
「何もしてない」(34)、つまりこれも「セックス」抜きで、しかも「一晩中看
病してた」(30)のである。

このようなふたりの関係の発端と終局の場面から察せられるのは、結局彼
らの関係を支配していたのは、男と女の間ではなく、母と子の関係ではな
かったかということである。つまり、「小指のない女の子」は「僕」を「相
手」として、自分と「お母さん」との関係を反復していたのではないのか。
ただし、時には「僕」を娘である自分の身代りとし、自分は「お母さん」の
役を演ずることによって。

「小指のない女の子」と「僕」との連絡は一方通行である。確かに最初の
「夜」,
「僕」は「葉書の住所を頼りに」(30)「彼女のアパート」(108)をつきとめ
る。また、「偶然」行きあつた「小さなレコード店」(50)で「仕事」(32)中の彼
女に再会する。しかしその後は、「僕」のほうから彼女に連絡したり、会いに
行ったりすることはない。「レコード店」で遭遇して以降、ふたりは三度デー
トするが、三度とも彼女が「電話」(56, 67, 98)で「僕」を呼び出すのである。

そして、「僕が冬に街に帰った時、彼女はレコード屋をやめ、アパートも引き払いい、「跡も残さずに消え去っていた。」(118) したがって「僕」にはそれが「僕と彼女を結ぶラインの最後の端」(55)となった。だが彼女のほうは、少なくとも「僕」の「帰省中」(65)の住居の「電話番号」(56)は知っているで、「僕」と連絡をとろうとすればいつでもできるはずだ。「私のことを覚えてる？」(56)と。

このような「僕と彼女を結ぶライン」のあり方は、「年賀状が来る」ことで「何処かで生きてる」とだけ知れる「お母さん」(63)と「小指のない女の子」とを「結ぶライン」のあり方とパラレルである。「年賀状」を出せる「お母さん」は娘の「住所」(30)を知っているが、「何処かで」と言う娘のほうは、「お母さん」の連絡先を知らない。ここでも連絡は一方通行なのである。

ただ、役割は入れ替っている。「僕」との連絡の場合には、「小指のない女の子」は「僕」を娘である自分に見立て、自分は「お母さん」の振舞いをまねているのである。彼女が「電話」で初めて僕と連絡をとったときの最初の言葉が、「私のこと覚えてる？」であったのは象徴的である。年に一度の「年賀状」は、まさに「私のこと覚えてる？」という意味でしかないのだから。

「小指のない女の子」は「僕」を前にしてははじめのうち、「あなたに関係ないわ」(33)、「最低よ〔傍点は原著〕」(34)、「あなたって最低よ」、「もう私に構わないで」(52)と言って、「僕」とのかかわり合いを拒む。しかし最後のデートのときは、「あなたがいなくなると寂しくなりそうな気がするわ」(108)、「私とセックスしたい？」(109)と言う。これは誘惑なのだが、結局、「きつとまた会えるさ」と言う「僕」に「何も言わ」(105)ずに、「消え去っ」てしまうのである。

「僕」に対する彼女のこうした拒否＝誘惑、現前＝不在という振舞いは、「お母さん」の彼女に対するそれをまねたものでもあるのだろう。そして、「消え去っ」た「お母さん」が、「何処かで生きてる」という、その現前＝不

在によって、娘に「夢」の中で「お母さん」と「跡」を追わせるように、「消え去つ」た「小指のない女の子」もまた、「僕」に「夏の夢」(107)の中でその「跡」を追わせるのである。「僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める」のだ。その際の「僕」の「泣きたい」(118)思いは、「消え去つ」てしまった「お母さん」に対する「彼女」の思いなのでもある。このように親子の関係を転倒した形でも、彼女は「お母さん」との関係を、「いつも」そして「同じ」わだちを踏んで、知らず知らずに反復しているのである。

「お母さん」の振舞いをまねることは、娘である「小指のない女の子」にとって、「お母さん」の不在の「跡」を埋める方法でもある。自分自身が「お母さん」その人になれば、「お母さん」を外にもとめる必要もなくなるのだから。

「僕」が「クリスマス[・]の[・]こ[・]ろ[・]ま[・]で[・]に[・]」は「帰つて」(105)きたとき、「小指のない女の子」はすでに「レコード屋をやめ、アパートを引き払っていた。」(118)ということは、それから間もなく彼女が受けとるはずであった「お母さん」からの「年賀状」も、「宛先不明、受取人不明」(74)で返送されたということであり、それ以降は彼女のもとに「お母さん」からの「年賀状が来る」こともはやないということである。彼女は「お母さん」が「何処かで生きてる」としか知らないので、転居通知の出しようもないのだから。つまり、彼女は「お母さん」の前からも「跡も残さずに消え去つ」たのである。それは「お母さん」の振舞いの最後の模倣であり、もう「お母さん」を必要としないということである。そしてまた、「お母さん」への「お母さん」をまねたこの振舞いは、「お母さん」への「復讐」とも言える。

「小指のない女の子」は「僕」との関係において、他方では、「相手の男」との関係を反復してもいる。当然のことだ。いずれの関係においても、共通の分母として母との関係があるのだから。彼女は「相手の男」＝「お母さん」

が自分を棄てたように、今度は立場を替えて、自分が「僕」＝「相手の男」を棄てるのである。

彼女は「僕」に「あなたは嫌な人じゃないわ」と言うが、「それほどはね?」と問われると、「肯」⁽¹⁰⁶⁾く。おそらく彼女は「僕」のことを「相手の男」のときと同様、「好きになれそうな気がした」のだが、それは「ほんの一瞬」のことにすぎなかったのだ。その証に、「あなたがいなくなると寂しくなりそうな気がするわ」⁽¹⁰⁵⁾と言いながら、「跡も残さずに消え去っ」てしまうのである。そして、それは「僕」＝「相手の男」＝「お母さん」への「復讐」なのでもある。

そのような文脈から見ると、「僕」が「山羊座」の生まれで、「なんとなく損な星まわりらしいな。イエス・キリストと同じだ」⁽¹⁰⁵⁾と言うのは、意味深長である。それはすでに指摘したように、「イエス」＝「僕」がユダ＝「小指のない女の子」に裏切られ、見棄てられることの伏線とみなせるのだが、同時に、「僕」は贖罪の「山羊」であるという暗示でもあるのだ。「僕」は「相手の男」＝「お母さん」の身代りの生贄となるのであり、それゆえにこそ「損な星まわりらしいな」と言っているのである。

「僕」は「少年」の頃、「とても人の良い山羊」⁽²³⁾にたとえられた。この「山羊」は、譬え話の中で、「重い」うえに「動かない」ので「役にも立たない」「時計」を「いつもぶらさげてる」。そこで「兎」が「山羊さんの誕生日」に、「とても軽く、しかも正確に動く新しい時計」を「プレゼントした」のだが、「山羊」は「僕」,⁽²⁴⁾「時計」は「僕」の「心」⁽²⁴⁾であるという。

「本当のことを聞きたい?」と問う「小指のない女の子」に「僕」は、「何か嫌なことがある度」に、「牛」の「胃の中」に見つけた「草の塊りを眺めて」、「何故牛はこんなまずそうで惨めなものを何度も何度も大事そうに反芻して食べるんだろう」と「考えることにしてる」⁽¹⁰³⁾と答える。しかし彼女に去られたあとの「僕」の「机」の「上には」、この「草の塊りがぶらさがっている」⁽¹¹⁹⁾のであり、「僕は夏にな」と「いつも彼女と歩いた同じ道を

歩」(118)くのである。

「僕」の「12月24日」の「誕生日」(105)には、「小指のない女の子」は「消え去っていた。」(118)つまり、「小指のない女の子」=「兎」は、「僕」=「山羊」に約束したかのように見えた「プレゼント」,「軽」快な「心」をくれなかった。そして「山羊」=「僕」は、昔も今も「いつも」,「時計」=「草の塊り」を「ぶらさ」げていることになる。それは「惨めな」過去の思い出にとらわれ続ける,「重」くて「動かない」,「僕」の「心」の象徴なのである。

「小指のない女の子」は「相手の男」のことを「すっかり忘れちゃったわ。顔も思い出せないのよ」(110)と言う。この言葉とこだまのように響き合う言葉を、読者はどこかで聞いた思いがする。ふりかえてみると、それは「僕」が彼女と初めて出会ったとき、彼女が最初に口にした言葉なのだ。「誰……あなたは？」と彼女はたずね、「覚えてない？」と聞き返す「僕」に、「彼女は一度だけ首を振った」(28)のだった。ここには循環があるように思われる。

「僕」が「小指のない女の子」を初めて見た「夜」(29)、彼女はジェイズ・バーの「洗面所」の「床」に「転がってた」。彼女「の」ことを「店じゅうの客」の「誰も知らなかった。」彼女は降って湧いたように現われたのだ。そして、次の「朝」(26)まで、添い寝している「僕」の「隣」で「眠っていた」(27)のである。

他方、「僕」が彼女を最後に見た「夜」も、彼女は「僕」と「抱き合った」(111)まま「眠っていた。」(112)そして、それを最後に、忽然として「跡も残さずに消え去っていた。」ここにも循環があるように思われる。

この二つの循環を組み合わせたとき見えてくるのは、「相手の男」=「僕」ということだ。「僕」の前から「消え去っていた」彼女は、「何処かで」(63),ある「朝」(26)「目覚め」(27)たとき、「横に」いる別の「相手の男」に言うことだろう、「誰……あなたは？」と。そして、そのとき彼女が口にする「相

手の男」という言葉は、「僕」のことをさしているのだろう。そしてまた、ある「夜」を限りに彼女はこの「男」の前から「消え去って」、また別の「朝」、あらたな「相手の男」の「横に寝ている女」⁽²⁷⁾となっていることだろう。

そのような循環を過去にたどれば、「小指のない女の子」が「すっかり忘れちゃった」という「相手の男」とは、「僕」のことなのだ。だからこそ「僕」は言うのだ、「彼女は僕を少しばかり懐しい気分させた。古い昔の何かだ」⁽³¹⁾と。

それでは「僕」が「相手の男」であったときの、「小指のない女の子」とは何者であったのか。彼女の前身は何か。

「小指のない女の子」は「眠つてい」る姿で「何処か」らともなく現われ、また「眠つてい」る姿を見せたのを最後に「何処か」に「消え去」る。言い換えれば、「意識を失くした女の子」⁽³⁴⁾として現われ、「意識を失くした女の子」として消えるのだ。それも「跡」片もなく。

それで思いつくのは、「若くして死んだ女」⁽⁷⁷⁾、「死んだ仏文科の女の子」⁽¹¹⁹⁾のことである。「意識を失くした」究極の状態は「死」であるからだ。また、「生き残った僕」⁽⁷⁸⁾にとって黄泉の国は「何処か」としか言えず、死者はその「何処か」からある日、とりわけある「夜」に、「生き残った僕」のもとに還り、また別の「夜」に、「跡も残さず」に「何処か」へと還ってゆくのであるから。

そのような観点から見れば、「隣に寝ている女」の「名前を思い出してみようとしたが無駄だった。第一に女の名前を僕が知っていたのかどうかさえ思い出せない」⁽²⁷⁾という「僕」の記憶の喪失も、「女の名前」を隠すための細工というこれまでの解釈とは別様の意味を帯びてくるだろう。

この「僕」の記憶喪失には、「目覚め」⁽²⁷⁾た「女」の「誰……あなたは？」⁽²⁸⁾という記憶喪失と響き合うものがある。それは「僕」と「女」が、「僕にはまるで思い出せな」いものとなった「古い昔」の、「もつとごくあたり前

の状況でめぐりあつ」(31)ていたことを暗示するものであるだろう。

だが、「小指のない女の子」の前身は「死んだ仏文科の女の子」に限られているのだろうか。「僕」は言う、「死んだ人間について語ることはひどくむずかしいことだが、若くして死んだ女について語ることはもっとむずかしい。死んでしまったことによって、彼女たちは永遠に若いからだ」(77)と。もちろん、この「彼女たち」は一般論の複数形であつて、「生き残つた僕たち」(78)に対応するものだ。しかし、これまで見てきた「僕」と「女の子」たちの関係をふりかえるなら、「仏文科の女の子」に限らず、「僕」がかかわりをもつた「女の子」たちは、すべて「若くして死んだ女」であるとも言えることに気づく。

「初めてデートした女の子」・「最初の女の子」・「ヒッピーの女の子」・「リクエスト曲をプレゼントした女の子」、これらの「彼女たち」すべてが、「僕」の「知らない所」(60)、「僕」の「記憶の片隅」(46)の闇の中から、あたかも走馬燈に映り流れる幻影のようにつかまふかびあがり、また闇の中に溶け入るようにして「消え去つ」てしまうのだ。そして「それ以来」、彼女たちに「僕」は「一度も会っていない。」(59)

「僕」は「死んだ仏文科の女の子」の「写真を一枚だけ持ってい」(78)たのだが、その「写真」も「引越しに紛れて失くしてしまった。」(119)そして、彼女を含めた「三人の女の子の顔」を「誰一人としてはっきり思い出すことができなかつた。」(110)とすれば、彼女たちは「僕」の「記憶」の中で断片的な映像としてしか、「はっきり」しない幻影のようになにか「存在してい」(55)ないと言えるだろう。それは、「死んだ人間」である「仏文科の女の子」ばかりではなく、「僕」のかかわつた他の「女の子」たちもまた、「僕」の「記憶」の中で「永遠に若い」ままなのであり、「彼女たち」すべてが「若くして死んだ女」なのだということでもあるだろう。

「彼女たち」すべてを代表する位置にあると思われる「小指のない女の子」が、すでに述べたように、「意識を失くした女の子」として「何処か」らと

もなく姿を現わし、「目覚め」、舞台が回ると、また「眠」り、「意識を失くした女の子」として「何処」へともなく「消え去」ること、そして彼女には互いに「三万光年」彼方に、つまり前世ほどに隔たったところにいる「双子の妹」があるということ、それらはひとつのことを象徴しよう。「人生」(78)という舞台が回るにつれて、「僕」の前に入れ替り立ち替り現われ、手を結んで舞う「女の子」たちは、「小指のない女の子」を含む「彼女たち」すべては、ある「若くして死んだ女」の黄泉還りであり、生まれ変わり死に変わりして輪舞する分身たちなのだとすることを。

(7) 手紙でリクエストした女の子

第37章は「ラジオ N.E.B, ポップス・テレフォン・リクエスト」(112)の「アナウンサー」(46)の「おしゃべり」(43)と、彼が「紹介」する「一通の手紙」(112)によって成り立っている。

この「手紙」の差出人は「17歳」(112)で、「彼女」(114)と「アナウンサー」が言っているから、女性である。「彼女」は『風の歌を聴け』の中で、ただ一度だけ、第37章にしか登場していない。

一つの章が「アナウンサー」の「やあ、元気かい？」(112)で始まり、彼の「おしゃべり」に終始する一方、その章においてのみ登場する女性の人物がいるという構成は、物語前半の第11章の構成とよく似ている。第11章も、「アナウンサー」である「僕」の「やあ、みんな今晚は、元気かい？」(41)で始まり、彼の「おしゃべり」に終始する一方で、彼に「ミッチャン」(42)と呼びかけられることでその存在が間接的に、しかも一度だけ知られる女性の人物がいる。この相似は偶然ではあるまい。

ただし、第37章の「アナウンサー」の「おしゃべり」はすべて「放送中」(46)、「ON」(41)の状態でのものだが、第11章には「OFF」(42, 43)のときのものも含まれている。つまり、主人公＝「僕」の知りえないことが語られている。

続く第12章で「アナウンサー」⁽⁴⁶⁾は「僕」に「電話」をかけて、「ラジオ聴いててくれたかい？」⁽⁴⁵⁾とたずねる。このとき「アナウンサー」は「しゃっくりの止まらなくなったアナウンサー」⁽⁴⁶⁾と自分のことを言っていて、前の章は「しゃっくりが出そうだよ」⁽⁴⁴⁾で終わっているのだから、第12章は第11章の話の続きであることがわかる。

「僕」は「本を読みました」⁽⁴⁵⁾と答えている。ということは、第11章で語られている事柄全体、「OFF」のときのものはもちろん、「ON」のときのものも、主人公である「僕」はまったく「聴いて」いなかったということだ。

とすれば、第37章で語られている「ポップス・テレフォン・リクエスト」の放送を主人公である「僕」が「聴いて」いた保証はどこにもない。実際、「僕」は続く第38章でも、「後日談」⁽¹¹⁷⁾を語る第39章でも、「手紙」の「彼女」のことについてはまったく触れていず、「アナウンサー」によるその朗読を「聴いて」いた形跡がない。

それに、「僕」は「テレビ」について、「少しだけ見る。昔はよく見たけどね」⁽⁶⁹⁾と言っているが、この短い物語の中で、「僕」は5度「テレビ」^(19, 37, 60, 80, 101)を見ているのに比べ、「ラジオ」を「僕」が確かに「聴いて」いると言えるのは一回だけで、しかも「ラジオのトップ・フォーティーを聴きながら」⁽⁶⁸⁾とあって、「ポップス・テレフォン・リクエスト」ではないのである。

前項までに見てきた「女の子」たちはすべて、語り手＝主人公である「僕」と直接的なかわりがあった。しかし「手紙」の「彼女」とは直接的なかわりは何もない。うえ、「手紙」の朗読そのものも「聴いて」いなかったかもしれないのである。それに、これまでの「女の子」たちは、たとえば「小指のない女の子」のように、その特徴を示す語を伴って「……女の子」と物語の中で呼ばれていた。しかし「手紙」の「彼女」については、「女の

子」という言葉さえつかわれていない。とすると、「手紙」の「彼女」を「女の子」たちの輪の中に入れることは間違いではないかとも思われてくる。第一、「彼女」は踊るどころか、「ベッドに起き上がること」⁽¹¹²⁾さえできないのだ。

しかし、以下に述べるように、「手紙」の「彼女」はこれまでに見てきた「女の子」たちのひとりの分身とみなせることによって、また、ほかの「女の子」たちとあれこれの特徴を共有することによって、そして、「1970年」の「8月26日に終る」⁽¹¹²⁾「僕の話」⁽¹¹⁷⁾の中で、「僕」が「東京に帰る日」⁽¹¹⁵⁾である「8月26日」⁽¹¹⁶⁾のことが語られている第38章の直前の章に登場することによって、「女の子」たちの輪を結ぶ最後の環になっているとすることができるのである。

「ポップス・テレフォン・リクエスト」の「アナウンサー」が、聴取者である「君たちからもらった」のは「こんな手紙だ。」⁽¹¹²⁾

「お元気ですか？

毎週楽しみにこの番組を聴いています。早いもので、この秋で入院生活ももう三年目ということになります。[……]

私は17歳で、この三年間本も読めず、テレビを見ることもできず、散歩もできず、……それどころかベッドに起き上がることも、寝返りを打つことさえできずに過ごしてきました。この手紙は私にずっと付き添ってくれているお姉さんに書いてもらっています。彼女は私を看病するために大学を止めました。」⁽¹¹²⁻¹¹³⁾

「私」の性別は「手紙」の中では明示されていないが、「アナウンサー」は「彼女のリクエストをかける」⁽¹¹⁴⁾と言っている。「お医者様（素敵な人です）」とか、「誰にも愛されることもなく」といった「私」の言葉づかいから

女性と判断したのであろう。

「お姉さん」が「私を看病するために大学を止めました」というところで、読者には「記憶の片隅に何かひっかかっているのが感じられ」るはずだ。第12章で初めて登場する「リクエスト曲をプレゼントした女の子」(112)のことである。彼女も「病気の療養」を「理由」として「今年〔=1970年〕の3月に退学届けを出した」のだった。「療養」とはいえ、「大学の事務所」は「何の病気なのか」「については何も知らなかった」(55)というのだから、彼女自身の「病気」とは限るまい。

「この〔=1970年〕秋で入院生活ももう三年目」とすると、「私」の「入院」は1967年の「秋」のことで、それは「僕」と同じ「クラスの女の子」(46)であった「リクエスト曲をプレゼントした女の子」が「山の手にある二流の女子大」(55)に入学した年でもある。

「三年間」、病気で「入院」している「私」に「お姉さん」が「ずっと付き添ってくれている」ということは、彼女が「三年」前に「大学を止め」たととれるが、あいまいである。彼女の「女子大」が「山の手」にあり、彼女が「今年〔=1970年〕」の「春」までいた「下宿屋」も「学校に近い」(55)とすれば、そして「私」の「病室からは港が見え」(113)、「私」の「病院」も「山の方」(114)にあるとすれば、彼女が「女子大」に入学した年の「秋」に「入院」した「私」をठीいで「看病」しつづけてきたが、学業との両立が困難になって、「今年の3月」から「大学を止め」、「看病」に専念することにしたのだとも考えられよう。

「私」は「毎週楽しみにこの番組を聴いています」と言っている。彼女に「ずっと付き添ってくれているお姉さん」も、「もちろん聴いてる」(47)はずである。「私」は「ベッドに起き上がることも、寝返りを打つことさえできない」のだから、「毎週」の「土曜日の夜」(112)にラジオのスイッチを入れ、「ラジオ N.E.B」にダイヤルを合わせていたのは「お姉さん」以外にないのである。その「お姉さん」がまず「電話」(41)で「リクエスト」(46)し、妹で

ある「私」がそれをまねて、あるいは「お姉さん」にすすめられて「手紙」で「リクエスト」(114)するということは大いにありそうなことだ。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」の、主人公である「僕」に対する関係と、「手紙」の「私」の、「アナウンサー」である「僕」(114)に対する関係にはパラレルなところがある。

「リクエスト曲をプレゼントした女の子」は「彼女の名前」(47)を自分から「僕」に言うことはないし、その「住所と電話番号」も「僕」に明かされることなく、ついに「行く先」は「知ら」(55)れぬままに終る。

「手紙」の「私」も、「アナウンサー」の「僕」に「お元気ですか？」と語りかけ、「僕」に「君」と4度呼びかけられて親しげだが、「手紙」に「名前は書いてない」し、「君の病室から港が見えるんなら、港から君の病室も見える筈だものね」(114)と「僕」が言っているところからすれば、「電話番号」はもちろん「住所」も「書いてない」ということだ。

つまり、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」＝「手紙」で「リクエスト」した「彼女」は、語り手・主人公の「僕」＝「アナウンサー」の「僕」に親しげに誘いかけはするが、「僕」からの応答を望んでいず、その所在を明かさないうことで直接的なかわりをもつことへの拒否を示していると言える。

語り手・主人公の「僕」＝「アナウンサー」の「僕」、というのは、そのように考えれば、放送が「OFF」のときの「アナウンサー」の「おしゃべり」や、「聴いて」いなかったかもしれない放送の内容を主人公でもある「僕」が語っているという矛盾が解消するからでもある。

それに「手紙」の「私」は誰に向かって語っているのか。一見するところ、「私」に「君」とくり返し呼びかけている「アナウンサー」の「僕」に対してであることは明白であるかのようだ。しかし、「手紙」の中では、書き出しの「お元気ですか？／毎週楽しみにこの番組を聴いています」が、

「アナウンサー」への挨拶の言葉ともとれるほかは、「アナウンサー」のことも「番組」のことも一切触れられていない。

また、「アナウンサー」は「彼女のリクエストをかける。エルヴィス・プレスリーの『グッド・ラック・チャーム』(114)と言っているのだが、「手紙」の中にはこの「リクエスト」のことも書かれていない。「リクエスト」だけ別の紙に記されていたのだと見るほかないが、「リクエスト」は音楽番組の司会役である「アナウンサー」になされるものであるから、「リクエスト」のことが書かれていないことで、「手紙」が「アナウンサー」宛のものであるという最初の印象は一層薄くなる。

マス・メディアを介してのメッセージは、不特定多数の視聴者・読者に向けての独白であったり、思い出の中の、今では所在が不明であったり、直接に連絡をとることはためらわれたりする、そして必ずしも伝わることを望んでいないものでありさえする独白であることが多い。その場合、メッセージの仲介者である「アナウンサー」に語りかけているように見えても、それは形式的なものにすぎない。

そのような観点から「手紙」の書き出しの「お元気ですか？／毎週楽しみにこの番組を聴いています」と結びの「さよなら。お元気で」(114)を見なおすなら、それらは「君たち」(112)、不特定多数の聴取者への挨拶の言葉と受けとることもできることに気づく。さらに、「この番組を聴いて」さえないであろう「僕」への挨拶の言葉であるのかもしれないことにも。

「手紙」の「私」は、「誰にも愛されることもなく、何十年もかけてここで年老いて、そしてひっそりと死んでいくのかと思うと我慢できないほど悲しいのです」(113)と言っている。あたかも「私にずっと付き添ってくれている」はずの「お姉さん」は、「私」の影にすぎないかのように。たったひとりで「生き続け」(113)ているかのように。それが示唆しているのは、「私」と「お姉さん」が互いの影であること、「私」＝「お姉さん」であることだ。

言いかえれば、「私」から「アナウンサー」あるいは不特定多数の聴取者

としての「君たち」に宛てたものとも、「宛先不明，受取人不明」⁽⁷⁴⁾の独白ともみなせる「手紙」は、「お姉さん」から「僕」への、それも「宛先不明，受取人不明」で「返って」⁽⁷⁴⁾くることを予期した「手紙」としても機能しているのではないかということである。「お姉さん」とは、「リクエスト曲をプレゼントした女の子」なのであって、彼女は「私」の「手紙」の隠されたメッセージとして、「僕と彼女を結ぶラインの最後の端」となった「下宿屋」を「出た」後の「行く先」⁽⁵⁵⁾を「僕」にそれとなく伝えているのではないか。それと同時に、「さよなら。お元気で」と、「僕」に別れを告げてもいるのではないか。それは一見矛盾しているが、「手紙」に「名前は書いてない」⁽¹¹⁴⁾のも、「私」の「お姉さん」＝「リクエスト曲をプレゼントした女の子」であることを「僕」には伏せておくため、自分のほうからは明らかにしないためなのである。それは、「リクエスト曲をプレゼントした」ときと同じ振舞いだ。加えて、「手紙」の朗読を「僕」が「聴いて」いないこと、メッセージが独白に終りうることも十分予想されていたはずである。つまり、「手紙」の「お元気ですか？」と「さよなら。お元気で」とは、手紙の書き出しと結びの常套句の一つではあるが、「お姉さん」＝「リクエスト曲をプレゼントした女の子」から「僕」へのメッセージそのものなのでもあるということだ。

それに『風の歌を聴け』全体を見ると、「私」の「手紙」以外に、ふたつの手紙が登場人物の間でやりとりされているが、いずれもが「お元気ですか？」＝「さよなら。お元気で」の手紙と言えるのである。「小指のない女の子」⁽³⁰⁾「あての葉書」⁽³⁰⁾はおそらく「相手の男」からの別れの手紙であったであろうし、彼女が年に一度受けとる「年賀状」は、「何処かで生きてる」としかわからない「お母さん」⁽⁶³⁾からのものであった。それこそ「お元気ですか？」＝「さよなら。お元気で」の手紙の典型であるだろう。つまり『風の歌を聴け』の中で「手紙」は、再会＝別離，誘惑＝拒否，現前＝不在という矛盾したメッセージを併せもって機能していると言える。

きて、「手紙」の「私」は「17歳」で、「この秋」で「三年間」の「入院生活」(112)になるというのだから、「私」の発病、あるいは「ベッドに横になったまま」(113)の「生活」が始まったのは、14歳の「秋」であったことになる。

そこで読者は想い起こすはずだ。「1963年8月」に「14歳」であった「仏文科の女の子」のことを。

「彼女は14歳で、それが彼女の21年の人生の中で一番美しい瞬間だった。そしてそれは突然に消え去ってしまった、としか僕には思えない。どういった理由で、そしてどういった目的でそんなことが起こり得るのか、僕にはわからない。誰にもわからない。」(78)

「僕」のこの言葉は、「手紙」の「私」の身の上にもまたぴったりあてはまる。

「仏文科の女の子」が「14歳」であったのは「ケネディー大統領が頭を撃ち抜かれた年」(78)で、彼女の「一番美しい瞬間」はすでに死の影におびやかされていた。そして、「21年の人生」を自ら閉じて「若くして死んだ女」(77)となる。

他方「手紙」の「私」も、「回復の可能性」が「3%」という「病氣」にとりつかれ、14歳のときが「人生の中で一番美しい瞬間」となったのであり、「そしてそれは突然に消え去ってしまった」のである。以降彼女は「若くして死んだ女」同然となった。そして彼女も問うのだ、「世の中が何故こんな風に成り立っているのか」(113)と。その答えは、おそらく「誰にもわからない。」

このようにして「手紙」の「私」は「仏文科の女の子」ともまた重なり合うのである。

むろん違いはある。「仏文科の女の子」は「21年の人生」を自ら閉じたが、「手紙」の「私」は「どんなに惨めな」状況にあっても「少しずつでも

生き続け、「何十年もかけてここで年老いて、そしてひっそりと死んでいく」自分のことを「思」っている。しかしそれに続けて、そう「思うと我慢できないほど悲しい」とも言っている。彼女が「我慢」し、「ベッドの上で一生を終えたとしても耐えることができる」という保証はないのだ。「叫び出したくなるくらい」の「怖」(113)さや、「我慢できないほど」の「悲し」さから、彼女が「21年の人生」を自ら閉じたとしても不思議はないのである。

それに「手紙」の「私」は「名前」も住所も明かさなかった。彼女は「アナウンサー」からも、「君たち」と呼ばれる不特定多数の聴取者からも、応答を望んではいないのだ。おそらく彼女が「手紙」を再び投書することはなく、「さよなら。お元気で」という結びの言葉は、「一生」の別れの言葉でもあるだろう。それは「風の中を歩」き、「誰」かに「愛されること」(113)を願う者にはなく、「ひっそりと死んでいく」ことを、「若くして死んだ女」となることを「思う」者にふさわしい振舞いであるだろう。

第36章で、「小指のない女の子」が「頭の上をね、いつも悪い風が吹いている」(111)と言う。それに続く第37章で、「17歳」の「私」が「紹介」されているのは偶然ではない。「私」の場合、その「頭の上」を「吹いて」いる「悪い風」は最悪だからだ。「風向き」が「変わ」(111)って「回復」する「可能性」は「3%ばかり」しかないのだ。

また、「小指のない女の子」は「ずっと嫌なことばかり」(111)とも言っていたが、「手紙」の「私」も「お姉さん」が「言いきかせてくれ」なければ、「嫌な話」をしてしまったり、「嫌なこと」を「思いつ」(113)いてしまうのだ。

だが、「悪い風」につきまといわれているという境遇の類似にもかかわらず、彼女らが対照的な生き方をしていることも明らかで、この対照性のゆえにこそまた、第36章の末尾で「小指のない女の子」が「眠つ」た(112)姿で消えると、舞台はまわり、入れ替るようにして、第37章に「手紙」の「私」が登場してきてもいるのである。

「小指のない女の子」は、「人も好きになろうとしたし、辛抱強くなろうともしてみたの。でもね……」, 「いつも駄目だった」(111)と言って絶望している。それに比べて「手紙」の「私」は、「もし駄目だったらと思うととても怖い」が「よいことだけを考えるよう努力してみます」(113)と言って、希望を失っていない。「私」の「リクエスト」曲のタイトルが「グッド・ラック・チャーム〔幸運のお守り〕」(114)であるのは象徴的だ。

しかしまた、そのような対照性の背後に、なお類似を見出すことも可能である。「小指のない女の子」は「眠」りの中で、「夢を見るように」して「お母さん……」と「呟いた。」(111-112) それは絶望の中の希望の証であり、「完璧な絶望」は「存在しない」(7)のだ。そして「僕」は彼女に「二度と会えず、彼女は「跡も残さずに消え去って」(118)しまう。他方「手紙」の「私」は、先に見たように、たとえ「生き続けることができる」としても、生きながら「若くして死んだ女」となる道を選んでいるとも見える。いずれにしても、「私」が「この番組」に「手紙」を投書することは「二度と」はないと思われ、「名前」も住所も明かすことなく、これまた「跡も残さずに消え去って」しまうのである。

「1970年の8月8日に始まり」, 「同じ年の8月26日に終る」(12)「僕の話」(117)は、見方によっては、「僕」の知った「女の子」の話に始まり、「女の子」の話に終るとも言える。

「僕」は「初めてデートした女の子」と一緒に「エルヴィス・プレスリーの主演映画を観た」ことを「思い出した」が、その「主題歌」の歌詞は、「僕」は「彼女に手紙を書いた。／〔……〕／でも手紙は返ってきた。／宛先不明、受取人不明」(73-74)というものだった。

「夏もそろそろおしまい」(112)の、「僕」が「東京に帰る」(115)「8月26日」(116)を間近にした日に、「17歳」の女の子が登場し、「手紙」(112)を出すのだが、そこには「名前」も「書いて」なければ、住所も書いてない。つまり彼

女は「宛先不明，受取人不明」となる。そして、「彼女のリクエスト」は、「エルヴィス・プレスリー」の「グッド・ラック・チャーム」⁽¹¹⁴⁾であった。

このようにして円環は閉じる。「僕」の「甘い夏の夢」⁽⁸¹⁾は終り、「僕」のまわりを舞っていたかに見えた「女の子」たちは、すべて「宛先不明，受取人不明」となり、「跡も残さずに消え去」⁽¹¹⁸⁾るのである。「グッド・ラック [幸運を祈る]」という別れの言葉だけを残して。

だが、ひとり残された「僕」は「消え去」った「女の子」たちに「魅惑」^{チャーム}されつづけてゆく。「僕」の「机」に「ぶらさがっている」，「牛の胃袋から取り出した草」の「塊り」⁽¹¹⁹⁾が象徴するように。「牛」はこの「惨めなもの」を何度も何度も大事そうに反芻して食べる」⁽¹⁰³⁾のである。

そして「僕」は、「呪文」^{チャーム}に呪縛されたようにして、「何度も聴く」のだ、「カリフォルニア・ガールズ」の「レコード」を。

「ビーチ・ボーイズは久し振りに新しいLPを出した」と「僕」は言う。しかし、そこで「僕」が引用するのは、相変わらず「カリフォルニア・ガールズ」のリフレイン、「素敵な女の子がみんな、／カリフォルニア・ガールならね……」⁽¹¹⁹⁾なのである。

(完)

〔注〕

- 1) 数字をはさんだ()は、それに先立つ文・語句が「村上春樹全作品 1979～1989 ①」(講談社、1990年刊)に収録されている『風の歌を聴け』からの引用であることを、また()内の数字は同書のページ数を示す。
- 2) 『広辞苑』，岩波書店，1991年刊，2620ページ。
- 3) 『日本国語大辞典』第7巻，小学館，1974年，362ページ。